

江南佛蹟行記（上）

三 桐 慈 海
大 内 文 雄

一九八〇年六月一日、日航七八五便に乗りこみ、大阪空港を離陸。僅か二時間半足らずで上海空港に着陸した。あっけない程の短かさである。上海での今夜の宿舎に到着後、数十分後にはバスに乗り、市内の一応の遊覧に出かけた。再び宿舎に戻るや、すぐに夕食。何とも忙しい。今、こうして憶い出してみても、旅の一番の特徴だった欲張りとも言える程の慌しさが、既にこの初日に現れていたようである。団の名称は「中国文化研究者訪中団」、団長は東京大学の鎌田茂雄教授、団員総計二三名の一行である。

訪中の主目的は佛蹟にあったが、実際に訪問したのは佛蹟だけに限らない。行って見聞し得るものなら、何処にでも足を運ぼうという意気込みに溢れていた。また中国国際旅行社の方もそのような調査旅行を最大の好意をもって受入れ、かなり無理な行程をこなしてくれた。これは感謝の外はない。

旅程は、廬山↓天台山国清寺↓天童山天童寺↓杭州↓南京・

摂山棲霞寺↓蘇州↓上海である。以下、順を追って見聞したことを紹介してみよう。

廬 山

六月二日、早朝五時半に起床。朝食の後、上海空港を八時前に離陸、江西省の南昌へ向った。廬山へはそこからバスを利用する。南昌までの空の旅は約三時間半。長江流域の広大な田園地帯の上を飛ぶ。緑の絨毯を敷きつめたような、多くの水路によって区劃された水田の間を、錢塘江がゆったりと流れ、次いで連綿とつらなる山塊が西南に続いている。北側に太湖が見える、真下は西湖だと声がする度に、機体がバランスを失いそうである。やがて富春江が陽光に輝きながら蛇行しているのが視界に入ってきた。南昌空港では戦闘機とその側で草を喰む牛。その対照がおもしろい。休憩と昼食とを行う南昌・江西賓館に着くと、すぐに託送荷物を作る。今回の旅では二度この言葉に接する機会があった。一度は廬山行、再度は国清寺・天童寺行の時である。当面必要な日常用具等を三泊四日分選び、不必要なものを残して置く。残された荷物は次の目的都市に別便で運んでおいてもらう。

午後一時半過ぎ、一台のバスに全員が乗りこみ、江西賓館前を出発。バスには運転手が二人いる。廬山まで二〇〇キロ、五県を通過します、と当地の通訳兼ガイドの黄氏が言う。まず東林寺と周濂溪墓に立ち寄り、それから九江市を経て廬山での宿舎・廬林賓館に向う予定である。

八一大橋を通過して贛江を渡り、またその支流を渡る。九江まで一〇三公里との標識がある分岐点を、右に曲つてすぐ河を渡る。修水であろう。この修水を渡つてから小休止を取つた。民家の庭では小豚や鶏が一緒に遊んでいる。再び出発。暫く走ると永修県から德安県に入った。ここら辺りは見渡す限りの赤土の畑が続く。池の水まで赤く見える。天氣が良く、まっさらな空と赤い大地とのコントラストが美しい。あちこちに煉瓦を焼く窯場があつた。やがていつの間にか田園風景に変わり、隘口公社を過ぎて後、右手前方に廬山の峰が現れてきた。全体に丸味をおびた山容である。大漢陽峰らしき山もみえる。五時五〇分、廬山向陽公社前を通過すると間もなく、バスの中が急にざわめき、皆一勢にカメラのシャッターを切る。西林塔が見えたのだ。四時間以上もバスに揺られ続けての挙句であるから無理もない。かく言う私もその一人。写真で見慣れたあの塔である。夢中で撮っていた。

午後六時、東林寺前に到着。参道の手前に谿流がある。石がゴロゴロしているから、かなりの上流であることが解るが、急流と言う程ではなく、周りの景色もそんな風には見えない。のんびりした田圃の中の小さな川というに近い。若い男が川原の石を割つていた。この川を過ぎるとすぐに細い流れがあり、そこに小さな橋がかかっている。傍らに石碑があり、大きく「虎溪」とある。橋と言っても、碑がなければそれと気づかずに通る過ぎてしまう位の、欄干もない小さなものであるが、これが虎溪三笑で有名な処である。碑の傍ら、橋寄りに石獅子が基

立っていた。そこから細長い参道が北に真直ぐ延び、低い丘陵の麓に、赤い門とそれに連る塀があり、そこには「浄土」と大きく書かれている。慧遠による浄土教発祥の地である。門には江西省人民委員会による「廬山東林寺」の碑が埋めこまれていて、「一九五七年七月一日立」とある。寺門内に入って、客堂でお茶の接待を受け、果一と言う老僧によるこの寺の概略の説明があつた。接待には全部で五名の僧が当つてくれた。伽藍の規模、僧の数、どこから見ても東林寺は小寺と言わざるを得ない状態である。常盤大定博士のかの調査の当時と大差ないであろう。ただ、整備だけは立派に行われているようであつた。しかし僧の知識には時として錯誤があり、通訳の黄氏も、佛教に關しては全くの素人である。これも現代中国においては止むを得ないことであろうか。東林寺内で一時間程を費した後、果一師の丁寧な見送りを受けて門を出る。門前では拝観に訪れた十数人の人が入場券を買っていた。

すでに午後七時、陽の長いこの季節でも流石に暮れ始めている。寺の西側、西林塔との中間、道路傍らを少し登つた高手の空閑地に慧遠墓がある。ここは廬山が一望に眺められるところである。「晉遠公祖師塔」の石碑が建てられた墓塔は、全体がセメントで固められ、頂上部も欠落し、さびれた姿であつた。これは曾ては荔枝塔と称ばれ、半世紀以前の写真には、この円墳を保護する建物が撮られているが、今はその形跡も留めず、剥き出しの姿で夕陽を浴びていた。

七層の西林塔は道路左下に立ち、遙か頂上部には灌木を茂ら

せ、夕闇の中に聳え立っていた。塔の方に一人歩いて行ったが、既に時間の余裕もなく、約五メートル程の所で呼び戻されてしまった。西林寺の跡らしきものは全くないようである。

さてこの日のもう一つの目的地は、周敦頤（字濂溪）の墓所であった。彼は廬山と縁の深い宋学の先駆者である。所がこれがなかなか見つからない。案内の黄氏も運転手の二氏もその場所の見当が皆目つかめぬ様子である。慧遠墓下を出発して二〇分後、九江市の十里百貨商場前で停車し、道を尋ねる。黄氏は熱心に尋ねている。この旅の全行程に同行している費・李両氏も車からおりて協力している。七分後、どうやら行き過ぎたことが判たらしく後戻りした。所が、やれやれと思ったのも束の間、再び停車して道行く人に尋ねることとなった。どうも分らぬらしい。この頃、既に道は暗くなっていたが、バスは無灯火で走っている。危くて仕様がな。この後、もう二度停車し、五度目の停車で地元の人々の案内を得、どうやら目的地に行けそうな様子になって来た。土地の人に、団員の土田氏が持っている『中国文化史蹟』所掲の写真コピーを示した結果、見覚えがあると言うことだったようだ。外は真暗闇である。流石にバスもライトを点けた。カエルの鳴き声がさわがしい。

目的地附近に着くと、次は徒歩で進むことになった。各自持参の懐中電灯（と言っても持っている人は全体の3位だったが）で足下を照らしながら、一列になって畦道を抜け、緩い傾斜地を登る。七時四五分頃、案内された場所は、藁などの敷かれた左程広くもなさそうなただの地面だった。周りは畑らしい。上

方には松林だろうか、樹立ちの影がほのかに見えている。説明によると、文化大革命期に破壊されたとのことである。もしそれが事実であるとすれば、破壊は徹底的に行われたのであろう。もっとも暗闇の中でのことであるから、僅かに懐中電灯の明りと時折光るストロボの尖光の中から覗き見たに過ぎない。明るい日中であれば、或は別の発見もあったであろう。因みに、この辺りの住民には周姓が多いとも聞いた。帰りの途次、螢が畦・田圃に飛び交っている。よく見ると随分の数である。皆しばし子供に返って眺めていた。

八時少し過ぎに周濂溪墓趾を出発。案内してくれた土地の人とも別れて九江市内に入る。八時二〇分過ぎ、甘棠湖煙水亭前にて僅か二分の小休止。この附近は夕涼みの遊覧の人が多く、バスの入口附近は忽ち黒山のような人垣ができた。この後、能仁寺に十分ばかり立ち寄り、中に入れぬままに大樹の横、闇の中にぼんやりと浮ぶ塔の影を眺めるに止めて、愈々、廬山へと向かっていった。

九江市内を通り過ぎてより、延々と山道を登りつめに登った。車の内も外も真暗である。廬山の何処ら辺りまで行くのかと少々心配になって来た頃、突然、街の明りが見えだした。牯岭の街である。トンネルを抜ける。廬山賓館前に到着した時は、能仁寺を発ってから一時間五〇分を経過した午後十時三〇分であった。賓館側の人達に笑顔で迎えられ、応接室でお茶を頂戴した後、別棟の立派な食堂で遅い夕食を摂った。賓館の人達は、午後三時頃から我々の到着を待っていてくれたらしい。この日、

南昌の江西賓館を發つたのが午後一時半過ぎだったから、実に八時間弱を走り通して来たことになる。運転手が二人であつたのも成程頷ける。

廬山のここ牯岭街は、九江市とは温度差が十度程あると言われており、流石に涼しくて気分が好い。宿舎や食堂は傾斜地に建てられた石造の立派なものである。廬山には二万人ほどの人が住み、観光設備の整備や、研究や生産にあたっているのとこのである。

六月三日、七時半起床。天候は晴。時折り薄雲が流れている。今日は、廬山第二の高峰である五老峰に登る予定となつていたので、天気は誰しもが氣にかけていた。午前中は廬山の観光コースを廻る。先ず湖水周辺の花径に遊び、そこから断崖に上つてえられた小径を錦秀谷に向う。宋・陳舜俞の廬山記に

旧録に云く、谷中の奇花異草、殫くは述ぶべからず。三四月の間には紅紫地を匝り、錦秀を被うが如し、と。故に以て名と為す。

(卷一、叙山北第二)

とあるものである。眺望は誠に素晴らしい。観光地としての整備のためであろうか、幾人かの人が手すりを取り付けている。

観妙亭より仙人洞へと向う。観妙亭からは、遙か下方に東林寺・西林塔が見え、ずっと向うには長江がぼんやりと望まれた。

地平には薄雲がかかり判然としない。仙人洞には遊覧の人が結構多い。明・洪武二六年(一三九三)の御製碑があつた。ここで廬山の名産と聞く雲霧茶を喫んでみる。香りが良く、日本の煎茶風の味がある。待機していたバスで宿舎に戻り昼食となつ

た。

午後二時半頃、五老峰登山口に到着し、先ず最も低い峰から登つた。続いて黄氏の言う長兄の峰なるものに登る。これが五老峰の最高峰、標高は一四三六メートルである。断崖の先端に立つと真下に海会寺が小さく見え、鄱陽湖が左右に長々と横たわっている。後方を振り返ると長江も遠くに見える。気分甚だ爽快となる。下山の途次、ウグイスの声が聞えた。この登山道も、今盛んに整備されている。道からは見えぬ所に石切り場があるのだろうか、大きな石を幾人もでかつぎあげては敷きつめている。しかし急ぐ風ではない。「五老洞」との石刻の見える草叢に、芝蘭が自生していた。好い景色である。

この後、廬山植物園を訪れ、含鄱口に向つた。ここからは鄱陽湖や漢陽峰(廬山第一峰)・五老峰等の峰々が眺望できる。

時刻は既に五時を過ぎており、五老峰には次第に雲がかかり始め、東方の谷々には薄く霧が流れ込んでいた。

六月四日、廬山での二日目。この日午前中は廬山博物館・圓佛殿・天池塔・大天池寺趾等を廻る。

廬山博物館には『廬山地区冰川遺迹分布図』という五万分の一地図が掲示してあり、これには、一昨晩さんさん捜しあぐねた周濂溪墓の位置も判然と記入されてあつた。地図は一九七八年のものである。周濂溪墓が文革期に破壊されたとの説明を信ずるとすれば、それ以前に作製されたものを原図として再発行されたものだろうか。ともかくもこういった詳細な地図が、我々の手に入るようになれば、どんなにか便利だろうと思わざる

を得ない。博物館は二階建てで、一階は廬山の地勢の説示と書画の展示、二階は陶器類の展示に充てられていた。

昼食後、午後〇時半には廬林賓館を後にし、途中、望江亭に立ち寄って、山上からの最後の眺めを悞しんだ。これからは一昨日の夜登って来たのと同じ道を下りて行く。明るい陽光の中で見廻してみると、廬山の大きさが改めて感じられる。急勾配を相当なスピードで下りて行く。

宿舎で買った『廬山簡図』を見ると、廬山には、東北方を走る山北公路と西南方を走る山南公路とがあり、我々は東林寺・周濂溪墓・九江市と、廬山の西側を回って来たため、山南公路を利用することはなかった。山北公路を下りてから道を右にとり、白鹿洞書院・星子県を訪れた後、帰宗寺趾・星子温泉にまで足を伸ばし、次いで往路を帰路にかけて宿舎秀峰賓館に向う。午後二時半に小休止を取った時は、既に廬山の麓に下りていた。五老峰が目前に聳えている。登山を果したということによって皆一様に特別の親しみを感じていたのか、感嘆しきりである。出発して暫く走ったが、余り好い眺めが続くので、到々、写真を撮ろうということになり、もう一度小休止となつてしまつた。

廬山は西側よりも東側の方が、好い姿をしている。

我々が乗ったバスは、ちょいちょい故障し、その度に運転手二人で直し直ししながら走ってきたが、ここら辺りでもバスの機嫌が悪くなり、十五分程度の停車を余儀なくされたことがある。その時のこと。丁度バスが停った道の傍らに、二人の女性がしゃがみ込んで、何やら手を動かしている。窓から顔を出し

てみると、彼女等は両手に入る位の石を、金槌で小石に砕いている。どうやら道路に敷く砂礫石を作っているらしい。左側の田圃の方からは、天秤棒で石を運んで来る人もいる。いづれも若い人達である。周りに人家も何もない舗装道路上で、五六人の男達が、コールトールを煮ながら補修をしている場面は屢々見かけたが、こんな全くの手作業の光景には始めて出会した。噴き出す排気ガスに手を休める様子もなく、炎天下、帽子も被らず、黙々と砂礫を作る作業を続けている彼女等々に、一瞬気を呑まれる思いがした。

さて、白鹿洞書院へは、先の周濂溪墓趾の時と同様、土地の人の案内を得て行くことになった。間もなく溪谷に沿って走るようになり、古松が鬱蒼と茂り出す。それまでの、水田の続く平坦な風景とはまるで違つて、如何にも幽翠な趣きである。三時四〇分頃、書院前に到着。書院は、残念ながら大修理の最中だった。あちこちに木材や石材が積まれ、古い書院としての落ち着きもなく、また建物全体の構成も分りかねる状態である。石碑を埋め込んである廻廊で御茶の接待を受け、書院側の方からの簡単な説明を聞いた。唐の李渤に始り、宋の周濂溪によって再興され、朱熹に至って天下にその名を知らしめた古い歴史を持つこの書院も、建物自体は清末のものとかで、書院左右の廻廊にある石碑も、全て一二五基の中、半ば以上を明代のもので占め、残りは清代のものとの説明だった。碑面の撮影は禁ぜられた。

一時間近くの間問の後、次の目的地、帰宗寺趾に向つた。途

中、星子県に立ち寄り、五時半、寺趾に着く。寺趾とは言っても、大鍾が楠の大木の下に転がされているだけで、他には何もない。常盤博士の踏査の頃には、規模は小さくとも堂宇が存していたが、今は江西省労働大学星子県分校となっている。次いで寺趾の右方、潮沢の細い道を奥へと案内された。何処に行くのかと訝りながら、牛糞を避けつゝ十分許りを進むと、やがて王羲之の洗筆の地なるものが現われた。自然石に「右軍驚池」の石刻が施されている。王羲之ゆかりの地と称するものは、方々に遺されているようだが、これもその一つ。書家である団員の足立先生が言われたように、日本で言えば弘法大師のようなものなのであろう。

秀峰賓館では入浴できぬということで、少し先の江西星子温泉工人療養院に行き、始めて中国の温泉なるものに入ることにした。西洋式石造り(?)の浴槽が、戸無しの仕切りで区画されて通路の両側に並び、最も奥まった所に五・六人が一度に入れる浴場がある。浴槽毎に石鹸とタオルが置いてあり、湯もはられてあったが、シャワーもなければ桶もない。時間に余裕はなしで、ただ湯につかるだけであがってしまった。何とも要領を得ぬことである。

秀峰賓館に着いたのは、既に午後七時半に近かった。賓館へ通じる道路両側は、深山幽谷の趣きがある。そう思ったのも道理、ここが秀峰寺趾とのことである。夕食には、スッポンやカエルの料理が出た。なかなか美味い。こじんまりとまとまった好い旅館であるが、廬山山頂と較べ、暑くて寝苦しく、蚊が多

いのに閉口する。宿の売店に金星宋硯という名の硯があった。この辺りが産地らしい。

六月五日。薄曇り。朝食後、午前七時より一時間程、秀峰寺趾を散策する。賓館の左方、一寸入った小道の傍らに、小振りの三層の石塔がある。『中国文化史蹟』所掲の五層の石塔である。何時の頃、今の姿になってしまったのだろうか。小道をそのまま進むと大きく「龍潭」と刻された淵に出る。「米芾書」と記されている。賓館の右手には、顔真卿・王陽明の書の石刻が並んでいた。ここ秀峰賓館からは、香炉・双剣・鶴鳴等の峰々が連り見え、李白が「飛流直下三千尺」と詠んだ瀑布も仰がれる。景勝の地であり、今一度訪れて、その時はゆっくりと滞在したいものである。

午前八時、廬山秀峰賓館を出発。再び南昌の江西賓館に戻り、天台山・天童山行のための荷物造りを行った。この頃、雨がひどくなって来たが、その中を二手に分かれて、一方は南昌博物館、他方はタクシーで八大山人陳列館に向った。陳列館の建物は廻廊を設けた瀟洒なものだったが、中に陳列してある八大山人や石濤の書画は、皆、模写か写真である。一九五九年より続いているこの陳列館も四人組時代に頓挫を来し、現在もまだ正式には活動しておらず整備中との館長の説明だった。博物館では同地方の古代よりの文物がよく整理されていた。

廬山行二泊三日は、山頂を含めて廬山をぐるりと一周する旅となった。言わば廬山の周りをためつすがめつしながら走り抜

けたようなもので、山容を脳裏に刻みつけ得たのが、最大の収穫であったように思う。詳しい事は分らないが、廬山の佛蹟として伽藍を保持しているのは、東林寺を含めても数える程ではないだろうか。宋・陳舜俞の当時、百をもつて数え、常盤博士の踏査の当時でも十をもつて数える寺観が存在していたことを思うと、衰微の一語に尽きるであらう。今、廬山は霊山としてではなく、一大保養地として存在し、そして着々と整備が行われている。

天台山・天童山

六月六日。曇り。昨日、南昌駅発午後四時五十分の上海行き夜行列車に乗り込んで、杭州駅に着いたのが朝六時。そこからマイクロバス二台で天台山へと進み、国清寺に到着したのは、この日の午後一時過ぎだった。寝台車中の熱気に閉口し、バスの中でのガソリン臭さ(バスに予備の燃料が積まれていた)と、土埃りに悩まされる移動だったが、途中の紹興飯店での朝食、朝のクリークの風景は楽しいものだった。紹興は酒造りの街でも有名である。道端に積まれた無数の甕からは、何やら香りが漂ってくるような気配である。杭州からは水牛を見ることが多くなり、水田でのたくっている恰好や、少年を背にのせてゆったりと歩く姿も仲々好い。紹興九時の出発の後、バスは曹娥より曹娥江に沿って南行し、無輔装ながら平坦な道を、嵊県へと向った。途中、あれが会稽山らしい、雪竇山や四明山はどこら辺りだろうと地図と見較べながら、幾つかの町や村を通り過ぎ

る。時折現われる岡には、麦や豆、桑や茶の木などが整然と植えられていた。十一時頃、小休止。あちこちの岡の上には塔が見られ、廬山行とはまた違った感興を抱いた。それから次第に道が険しくなり、十二時半頃、分水嶺を越えると、間もなく立派な水道橋が現れ、そこを過ぎると、左手前方に、赤城山とその頂上に立つ塔が遠望された。やがて赤城山を左に見つ、門前町とも思える城関鎮バス停前を左に折れて、グルッと大廻りする恰好で山の谷間に入っていくと、そこが国清寺境内である。右手に隋塔が聳えている。

国清寺は天台山系の中の佛隴峰の南麓にある。この地に建造されたのは、智顗の遺志によるもので、現在の伽藍は清・雍正二年(一七三四)の重修である。谷川にかけられた石橋を渡ると、「一行到此水西流」の碑がある。「隋代古刹」と大きく書かれた壁の横手から山門に入れば、伽藍は山の傾斜に従いつつ、奥に向って弥勒殿・雨花殿・大雄宝殿の順に建てられ、東側には方丈楼・齋堂そして禪堂が、西側には妙法堂や観音殿が並んでいる。大雄宝殿は一九七三年に大修理が行われた。我々の宿舎は伽藍境内の東側に隣接している。昼食後、国清寺境内を案内され、夕方六時半まで自由参観となる。伽藍内部の撮影は禁止された。

自由時間を利用して、隋塔と呼ばれる大導師塔まで行き、その裏山に登ってみた。六角九層、高さ五九メートル、実に堂々たる建築である。寺内で買った説明書には、隋・開皇一八年(五九八)の創建当時のものと記されている。しかし塔の外壁は相

当に崩れ落ちている。内部も空洞となっており、向う側まで素通しである。赤城山の塔が並行して見える地点まで登り、暫く休憩。周りは松林となっている。

寺側の説明では、国清寺には、現在七九歳から一九歳までの六五名の僧が所属していると言う。彼等は僧としての生活を送る一方、天台県の人民公社に属し、国清寺は国清寺生産大隊と称して、米・麦等を生産している。生活の面では余裕があり、また現在二〇〇ヘクタールの山林をも管理しているということである。

六月七日。雨。午前三時からの勤行を参観した。小雨の降る闇の中、宿舎から大雄宝殿に抜ける通路が分らず、まごまごしている内に勤行が始まってしまった。僧三六名の他、四五名の参加者があり、中に、法服を纏った女性(優婆夷と言うべきか)が二四名いる。読経に続き、比丘を先頭に老優婆夷、続いて老若男女が、次々と薄暗い堂内を本尊前・羅漢前と、前に手を組み念誦しながら行道を始めた。四・五歳位の女の子もいれば二〇歳前後の人民服を着た女性もいる。次いで再び本尊前で読経・跪拝。堂内左側では、おさげ髪 of 若い女性が跪拝を行っている。経文は知らないらしい。しかし、跪拝台もない所で、床に直接跪いて拝礼を行っていた。勤行は四時半少し前に終わった。

七時半、智者塔院に向う。智顗歿後、その門弟達が移葬した場所である。急な坂道を上りつめると、曲りくねった山道を過ぎ、大きな谷間を横切る。時折り山畑や水田もあり、広い山間には村もある。バスで約三〇分揺られての後、徒歩に変わり、一

五分程歩いて智者塔院前に到着。山の斜面に作られた細い石段を一行になって上り下りする我々に、雨と風が容赦なく吹きつけ、簡易のレインコートなど役立たずの有様だった。塔院向い側の客堂でお茶を頂く。雨漏りがひどい。塔院は、中央に智者肉身塔が安置され、その周囲の壁には、国清寺ゆかりの祖師の半身絵像が、額に容れて掛けてある。智者の絵像が肉身塔のま後にあり、右に章安・慧威・荆溪、左に法華・左溪・道遠と続き、左右の壁にも、行満・物外・清竦・宝雲・四明(以上肉身塔向って右)、広修・元瑒・淨光・慈雲・幽谿(以上向って左)の絵像が掛けられている。肉身塔は文革期に破壊されたが、その後材質もそのままに修復されたとのことである。帰り際、好奇心をのらせて客堂の後に廻ってみると、石段があった。両脇には小さな石獅子も残っており、「真覺講寺」の額も掛っている。以前はここが正面入口であったのだろう。今は完全に塗り潰されて壁となっており、僅かに鉄格子のはまった窓が一つ開いているのみである。

相変らずの雨の中を、智者塔院より景勝地の石梁に向った。増水した急流が石梁にぶつかり、激しく飛沫をあげている。川の傍らにまで行ってみる。中には頭から飛沫を浴びながら、写真に収まっている元気な人もいる。周りは竹林で、足下は落葉が積もって滑り易い。石梁を少し登った所に大きな廃寺があった。聞くと、方広寺と言う。五百羅漢で有名なものという方広寺だろうか。伽藍の一部は修理中との答えだったものの、内も外もひどい荒れ方で、特に内部には何も残っておらず、材木や

らが雑然と積まれていた。国清寺の伽藍だけが際立って立派に保存修復されていることが良く分る。

天台山の最高峰で、智顗ゆかりの華頂峰は、現在登頂禁止となっている。まことに心残りであった。なお、国清寺のバス事務室の中に天台県の五万分の一地図が貼ってあった。勿論、国内用である。

午後二時半、雨の中で過した感のある国清寺を後にし、天台山の南側をぐるっと廻って、次の宿泊地、南溪温泉に向った。

寧海を通り、象山港を右手に見つゝ走った後、西へ脇道を進んで、温泉に着いた時は、午後五時を廻っていた。浙江省寧波南溪温泉は西南方に天台山の高峰を仰ぎみる位置にあり、廬山々麓の星子温泉とは趣きを異にしている。温泉はというと、これはまたとてつもなく大きく深い湯槽が、ツインの各部屋にある。バルブを回すと轟々と湯が迸り出、湯につかるには数段の階段を下りねばならない。広く高い湯槽の底にうずくまりながら、身体を洗うもならず、持て余し気味で入浴を済ませた。

六月八日。曇り。午前七時半に出発。寧海・奉化・鄞の各県を通る。あちこちに塔が遺存している。九時半、寧波市内の天封塔に着いた。高さ約四五メートル。周囲は中学校になっている。すぐにバスに乗り込み、甬江を渡って、一路天童寺に向う。天童寺は寧波の東三六キロである。途中の田圃からDDTの臭いがする。一〇時、太白山系が見え出すと、間もなく天童寺への入口である鎮麟塔が迫って来た。左手には阿育王寺の塔も見える。天童寺に至る道路の傍らには、それまでのどの土地のもの

のよりも立派な墓が並んでいた。「○○公之墓」「○○先生之墓」等と彫りこんだ石碑を中央にして、左右に石積みが施してある。

天童寺には三つの山門がある。伏虎亭・古山門・景情亭とくぐって行く参道には、亭々たる松の大樹が立ち並んでいる。十時半頃、天王殿前に到着。堂々たる大建築である。中に入ってみると、四天王像の巨大さに圧倒されるばかりであった。天王殿の高さは一九メートル半、四天王各像の高さは七メートル四〇センチとのことで、国清寺のものより遙かに大きい。この天王殿と共に、大雄宝殿も現在は内部を修理中である。中でも大雄宝殿左右の雄大な十八羅漢像や、また本尊（釈迦三尊）裏の渡海観音などは、まだ彩色以前の状態だった。彩色されたものより、一層の迫力が感じられる。

この修理作業が完了すると、天童寺では、新たに僧を募集するとのことである。今は八一歳から四〇歳位までの三七名の僧がいる。また、これも文革期間中の被害には相当のものがあつたらしく、歴代住持の墓一六六の殆どが壊されてしまったらしい。その他、最も奥まった所にある羅漢堂も被害に遭っていた。ここには十八羅漢の画像石（陽刻）があるが、文革中は石灰で掩蔽されていたとのことである。勿論今は旧に復されているものの、まだ所々白い石灰が残っているのが目についた。羅漢堂自体が学校の用に供されていたとのことで、それを示すかのように入口には黒板が残り、内部の壁には標語が貼られたままになっていた。恐らく、教室にするために塗り潰されたものであ

ろう。画像石はなかなか好いものであるが、残念なことに撮影は禁止された。ともかくも修復後は、伽藍を具備した有数の寺院となるであろう。

滞在三時間後の午後一時半、天童寺を出発。途中、鎮蟬塔下で小停止。附近に人造湖がある。天童寺から一〇キロ程走ると寧波方面への分岐点に出、そこを右に一三〇〇メートル程行くと阿育王寺に着く。阿育王寺は現在修復中ということで非公開となっていた。寺の左方、堀沿いの道路の傍らに、往路で見た八角七層の大塔が古色蒼然と聳えている。第二層まで足場が組まれていた。修理を行っているのだろうが、この時は誰もいなかった。また阿育王寺附近の山裾には「永安公墓」と言う公共墓地がある。

再び寧波市内に戻ってからは、甬江・余姚江と渡って杭州へ向った。この間に通過した地名は、史籍の上で馳染みとなっているものが多い。鎮海・慈谿・余姚・上虞の各県を通り、そして午後五時半には曹娥江を渡り、一昨日天台山へと向った嵊県方面への分岐点を通過した。

この附近の民家には黒い壁が多く、そこに白の単色か或いは美しい彩色で絵が描かれている。中央の絵柄は鳳凰のような鳥のものが多く、また、慈谿県に入ってから、俄然ヒマワリの群落が目につくようになり、余姚県に入ると、そうした畑の中に時折り屋形をした長方形の石棺らしきものを見かけるようになった。同乗している馮氏に聞くと、墓だと言う。こうした墓は自営地に作るらしく、従って家の近くということになるが、

家の庭といった場所に、ヒマワリに囲まれた真新しい純白の墓があるという風景は、一種異様に見える。

夕食のため再度紹興飯店に立ち寄った後、杭州での宿舎西冷賓館には午後九時頃到着した。これからは都市部を列車でつないでの旅となる。(未完)

(大内記)

賛助会員募集

次の要項で賛助(定期購読)会員を募集いたします。会員には本誌を発行後すみやかにお送りし、本会の出版物を割引価格でおわけします。

○年間会費(二冊分)

国内 一、七〇〇円

海外 二、〇〇〇円(円払い)

○申込み 603 京都市北区小山上総町

大谷大学佛教学研究室

*申込みは郵便振替が便利です。

(京都 603 大谷大学佛教学研究室)